自閉する文学表象

―『雲は天才である』に語られる啄木の自我―

林　一晟

はじめに

故郷である渋民村で代用教員を務めた啄木が十日間ほどの上京で漱石や藤村らから刺激を受け、執筆に踏み切った小説『雲は天才である』（明三九・七稿、同一一補稿　以下、『雲』と表記）は、代用教員である自己を描き、自己の体験や思想を前面に押し出した作品であった。猪野謙二[一]も『雲』を「作者の自我というものをまったく孤立的に、しかもどこまでも無批判に、全面肯定の態度で打ち出している」小説として位置づけ、「この作品の面白さもつまらなさも、そこのところにあるという気がします」と指摘しているが、この全面肯定の自己表象をめぐってこれまでさまざまな評価がなされてきた。例えば、小田切秀雄[二]が代用教員としての自己を語った前半部に対して「じつさいに身をもつて啄木が試み体験してきた、そのなまなましい真実性が作品の生命を救つて」いると肯定的な評価を下すのに対し、橋本威[三]はその自己表象を「いい気な自己礼讃」と酷評するといった具合である。当時の啄木自身にとって、小説を書くこととはすなわち自己を語ることであり、その結果代用教員という自己をあまりに語り過ぎたがゆえに否定的な批評をも受けることになったわけだが、その点について啄木のいたらなさを非難することよりも、むしろ彼が自己の感情や思想を押し出したことが、どのように作品に対して影響を及ぼしたかという点を検討していくことが作品研究においては肝要ではないだろうか。換言すれば、『雲』執筆にあたって「これは欝勃たる革命的精神のまだ渾沌として青年の胸に渦巻いてるのを書くのだ[四]」と意気込んだ彼自身の「混沌」とした精神の内実を詳らかにし、その精神の発露が作品に与えた影響を明らかにしていくことが、『雲』再評価には必要だということである。

『雲』には小説の分裂をはじめとするさまざまな問題が指摘されているが、それらはすべて啄木の自己表象に帰結すると稿者は考えている。本稿では啄木の自己表象の様相や作品への影響について検討することで、それに付随する諸問題に言及するとともに、当時の啄木にとって小説を書くとは何だったかという問題に迫りたい。

一　個に閉ざされた反逆――新田耕助の物語

課外教授の場面は啄木の感情が最も露骨に表出されている箇所の一つとして挙げられる。その様子について、新田は次のように語る。

初等の英語と外国歴史の大体とを一時間宛とは表面だけの事、実際は、自分の有つて居る一切の智識、（智識といつても無論貧少なものであるが、自分は、然し、自ら日本一の代用教員を以て任じて居る。）一切の不平、一切の経験、一切の思想、――つまり一切の精神が、この二時間のうちに、機を覗ひ時を待つて、吾が舌端より火箭となつて迸しる。的なきに箭を放つのではない。男といはず女といはず、既に十三、十四、十五、十六、といふ年齢の五十幾人のうら若い胸、それが乃ち火を待つ許りに紅血の油を盛つた青春の火盞ではないか。火箭が飛ぶ、火が油に移る、嗚呼そのハツ〳〵と燃え初むる人生の烽火の煙の香ひ！（中略）我々はまだ年が若い。血のない人間は何処に居るか。……あゝ、一切の問題が皆火の種だ。自分も火だ。五十幾つの胸にも火事が始まる。四間に五間の教場は宛然熱火の洪水だ。自分の骨露はに痩せた拳が礑と卓子を打つ。と、躍り上るものがある、手を振るものがある、万歳と叫ぶものがある。完たく一種の暴動だ。自分の眼瞼から感激の涙が一滴溢れるや最後、其処にも此処にも声を挙げて泣く者、上気して顔が火と燃え、声も得出さで革命の神の石像の様に突立つ者、さながら之れ一幅生命反乱の活画図が現はれる。涙は水ではない、心の幹をしぼつた樹脂である、油である。火が愈々燃え拡がる許りだ。

新田の知識や思想が火のように生徒へ伝達され浸透していくさまや、それをとおして形成されていく新田と生徒の強固な連帯関係を、課外教授の様子を描くことで啄木は表現してゆく。彼が明治三九年四月に「渋民日記」に記した教育に対する意気込みをみると、この場面はそのまま啄木の理想の教育を具現化した場面として受け取ることができよう。その意気込みは以下のものであった。

しかし、彼等の前に立つた時の自分の心は、怪しくも抑へがたなき一種の感激に充たされるのであつた。神の如く無垢なる五十幾名の少年少女の心は、これから全たく我が一上一下する鞭に繋がれるのだなと思ふと、自分はさながら聖いものの前に出た時の敬虔なる顫動を、全身の脈管に波打たした。不整頓なる教員室、塵埃にみち〳〵たる教場、顔も洗はぬ垢だらけの生徒、あゝこれらも自分の目には一種よろこばしき感覚を与へるのだ。学校は実に平和と喜悦と教化の大王城である。イヤ、是非さうせねばならぬ。[五]

「全たく我が一上一下する鞭に繋がれ」た生徒たちへ啄木自身の知識や思想を吹き込んでゆく行為は彼にとっての「平和と喜悦と教化の大王城」を築き上げる行為にほかならない。田島校長や古山首座訓導に「職員室の異分子」「平和の攪乱者と目されて」いる新田にとって、課外教授の場は「教化」という大義名分のもとに彼の思想が生徒たちによって肯定・吸収されるという意味において彼にとっての「平和」が保障される場である

とともに、そのことで「喜悦」に満ちた空間と化す、そのような「大王城」として作中に屹立するのである。

以上のように、課外教授の描写は啄木の教育思想を表出した産物として受け取ることができるが、このような感情吐露は啄木のナルシズムに接続されると同時に小説としての瑕疵として受け取られる。久保田正文[六]は啄木散文の特徴として「彼が顔を出す度合いに応じて失敗」すること、そして「それらの失敗作には、小説技法上のセンティメンタリズムが明らかにうかび、それは同時に啄木の生涯に否むべくもない人間的なナルシズムの要素と重なり、結び合い、そこから文学方法上の弱さが結果する」と指摘するが、課外教授をめぐる感情の表出はまさに『雲』における「文学方法上の弱さ」の誘因となってしまっている。ここに啄木の自己表象による文学技法上の失敗をみることができるが、なぜ啄木はこのような失敗を犯してまでも課外教授における自己の思想を披歴し、生徒と連帯を結ぶという教育的成功体験を語ったのだろうか。それは、自己流の教育方法によって生徒に感動を与える自身の成功を示すことで、続いて新田が批判の対象とする教授細目の無意義さを強調しようとしたためではないか。

啄木は明治三九年四月二四～二八日付の日記[七]に高等科生徒への課外教授について述べているが、そこでの教授法について彼は「教授上に於ては、先ず手初めに修身算術作文の三科に自己流の教授法を試みて居る。文部省の規定した教授細目は「教育の仮面」にすぎぬのだ」と語っている。形骸化した教授細目の無意義さを「教育の仮面」と揶揄するとともに、教授細目に対する自己流の教授法の優位性を啄木は示している。このことに鑑みると、新田の課外教授の成功は教授細目批判の布石としてみることができよう。

さらにいえば、新田耕助作曲の校歌採択をめぐる田島校長との論争はその校歌を生徒が歌い出したことに端を発した形式にはなっているものの、一貫して論争の奥底にあるのは新田自身の校長批判であり、「平和と喜悦と教化の大王城」としての課外教授を執り行う権利を校長から剥奪されたことへの怨恨なのである。新田は課外教授の権利剥奪に際し、田島校長を「完全なる『教育』の模型として、既に十幾年の間身を教育勅語の御前に捧げ、口に忠信孝悌の語を繰返す事正に一千万遍、其思想や穏健にして中正、其風采や質樸無難にして具さに平凡の極致に達し、平和を愛し温順を尚ぶの美徳余つて、妻君の尻の下に布かるゝをも敢て恥辱とせざる程の忍耐力あり」と批判するが、この言葉どおり校長はその「完全なる『教育』の模型」の様相をもって新田との論争に臨む。

新田さん、学校には、畏くも文部大臣からのお達しで定められた教授細目といふのがありますぞ。（中略）で、その、正真の教育者といふものは、其完全無欠な規定の細目を守つて、一毫乱れざる底に授業を進めて行かなければならない、若しさもなければ、小にしては其教へる生徒の父兄、また高い月給を支払つてくれる村役場にも甚だ済まない訳、大にしては我々が大日本の教育を乱すといふ罪にも坐する次第で、完たく此処の所が、我々教育者にとつて最も大切な点であらうと、私などは既に十年の余も、――此

処へ来てからは、まだ四年と三ケ月にしか成らぬが、――
努力精励して居るのです。

教育の最高機関である文部省を崇め、そのお達しで定められた教授細目を「完全無欠」と称賛し、それと寸分違わぬ教育を施すことを教育者の使命とする田島校長はまさに新田のいうところの「完全なる『教育』の模型」であり、そうした教授細目を拠り所として新田の校歌採択に異議申し立てをする。そうした校長の姿を新田は「平凡と醜悪とを「教育者」といふ型に入れて鋳出した此人相には、最早他の何等の表情をも容るべき空虚がないのである。誠に完全な「無意義」である」と峻拒したうえで、校長の論拠とする教授細目に「代用教員は教壇以外にて一切生徒に教ふべからず、という事か、さもなくんば、学校以外で生徒を教へる事の細目とかいふもの」が存在しないことをもって、校長を論理的に言い負かしてゆく。ここには課外教授を休講にした田島校長に対する反逆精神を原動力として校長に勝利を収める新田の姿が明示されているわけだが、さらにいえば啄木が「教育の仮面」として揶揄した教授細目に執着する校長を論破する内容からは、教授細目や文部省に対する批判というよりもむしろ無意義な教授細目に執着する校長の「完全な「無意義」」さを批判することを目的として、『雲』の前半を描いた啄木の意図を読み取ることができるのではないだろうか。事実、啄木は「林中書」で次のように述べている。

学制の整備といふ点に於ては、種々非難すべき問題も少なからずあるけれども、兎も角日本は東洋一である。然し、学制の完全不完全は、人間を教育するといふ大問題を論ずる際に当つては、決して重大なる事でない。完全無欠な教育学、それから割り出した完全無欠の学制、これらは無論有つて差支もないが、又無くても別段不自由は感じないものだ。真の人と真の精神とあれば、他に何ものが無くても立派な教育は出来る。若し夫れ完全な教育学と学制とがあつても、それを活用する「人」が無ければ、一切のものが無いよりもまだ〳〵危険な結果に陥る。[八]

啄木はあくまで「完全な教育学と学制」を活用する人間に焦点を当てて教育を論じているのであり、この点を踏まえても校歌論争自体は校長批判に終始していたことが理解できる。加えて、そのような教授細目に縛られない新田の自己流の教育方法によって「平和と喜悦と教化の大王城」と化す課外教授の様態を示すことで、新田＝啄木の教師としての資質の高さを存分に披瀝していくことが、課外教授での成功体験を語った所以であるといえよう。

「欝勃たる革命的精神のまだ渾沌として青年の胸に渦巻いてるのを書く」ことを『雲』執筆の意図とした啄木の発言からすると、こうした校歌論争での勝利はそのまま彼の「欝勃たる革命的精神」の発露として受け取ることができる。しかし、このことについて小田切秀雄[九]は、その革命の相手は「体制がわの教育行政体系の最末端の、しかも辺地に孤立した無気力な校長と古手の首座訓導との二人だけ」に過ぎず、『破戒』に描かれているていどの教育行政機構の重圧すら視野のそとにおかれて」いるとともに、『坊つちやん』に描かれた赤シャツや野だいこたちの体制よりも、もっと弱い敵を相手にしての〝革命〟」

でしかないと指摘している。この要因は先に述べたとおり、そもそも『雲』を媒介とした啄木の批判が校長や首座訓導という限定的な対象に向けて行うことが目的とされていたことにあり、教授細目や文部省といった「教育行政機構」への批判は念頭にすら置かれていなかったことにある。その意味において、『雲』における啄木の革命は「個人的反逆」[一〇]に過ぎないのであり、自己に閉ざされた感情の表出の域を出ないのである。新田が校長を嫌悪する理由が「一毫の微と雖ども自分の気に合ふ点がなかつた」ことにあることからも、作中の革命が平凡を嫌う啄木の個人的要因に帰結することを指摘することができる。さらに、当時の啄木が「故郷の人間は常に予の敵である」[一一]という状態に苛まれていたことに鑑みても、あくまでも自身の生きる環境において敵と見なす存在に対する反逆しか描きえなかったことが、「すべてのものが皆小説の材料なやうに見え」[一二]た当時の啄木の個人に閉ざされた文学表象の実態を明らかに示していたといえよう。すなわち、自身の教育に対する自負や周囲の敵（と見なす存在）に対する勝利を描き出したことはそのまま当時の啄木自身の感情や思想が文学表象として具現化されたことを意味しており、その意味において『雲』の文学表象は自己の問題に始終する、自己に閉ざされた表象であったといってよい。

二　鼓舞される闘争する自己――石本俊吉の物語

田島校長に対する新田の反逆は「平和と喜悦と教化の大王城」としての課外教授を奪われたことをその発端としていることは先に指摘したとおりであるが、校歌論争での勝利はあくまで校長の論破に留まり、根本的な解決をみないまま完結している。そのように考えると、新田の反逆ないし革命は未だ達成されていないわけであり、「平和と喜悦と教化の大王城」を奪い返すまでは完遂されない行為であるといえる。では、啄木は作品のどこに彼の革命の結末を設定したのだろうか。それは、乞食である石本俊吉を校長がそのヘゲモニーを掌握する職員室に招き入れたことだったのではないだろうか。

『雲』のなかで、職員室における官僚制的上下関係は席次という形で示される。

> 突当りの並んだ二脚の、右が校長閣下の席で、左は検定試験上りの古手の首座訓導、校長の傍が自分で、向ひ合つての一脚が女教師のである。吾校の職員と云つぱ唯この四人だけ、自分が其内最も末席なは云ふ迄もない。よし百人の職員があるにしても代用教員は常に末席を仰せ付かる性質のものであるのだ。御規則とは随分陳腐な洒落である。

『雲』が執筆された当時、学校では「席次という形で内部の官僚制的秩序化が進」[一三]んでいたことを踏まえると、この席次の描写は職員室という空間において校長を頂点として据えた際、代用教員が最底辺に位置づけられるという規則による学校社会の官僚制化が如実に表現された描写であるといえる。このように、S――村尋常高等小学校の職員室という空間は、そこに形成された教員階級のヒエラルヒーをとおして、そのトップに立つ校長がヘゲモニーを掌握する空間として作中に定位されるの

である。このようにみていくと、校長やマダム馬鈴薯が拒絶する乞食の石本俊吉を新田が職員室に招き入れる行為は、職員室という校長の支配空間を侵害することを意味する。さらにその石本が「実に優秀なる異彩を放つ所の奇男子」であることによって新田の行為が正当化され、これをもって「疑ひもなく征服者の位置に立つて居る」という感覚を新田は抱くこととなる。これをもって、職員室の空間的ヘゲモニーは校長から新田の手に移ることとなるのであり、ここにS――村尋常高等小学校という「大王城」の奪還を啄木は描いたといってよい。この点について、米田利昭[一四]は新田が征服者の意識を抱くのは「自分が劣悪なるものをひき入れ、最低の底辺に立つことで、本来自分と同輩である筈の権威者をその劣悪なるものの傍へ引きずり下ろすから」だと指摘するが、むしろ石本の優秀さにより新田自身の選択が職員室という場において正当化され、職員室のヘゲモニーを握ることこそが彼に征服者としての意識を抱かせる要因だったといえよう。「所詮人生の奮闘とは、血と涙とを以て「理想」の光明城を攻め取らむとする努力の意義[一五]」と啄木が述べたように、『雲』における彼の革命や「人生の奮闘」は、石本俊吉を招き入れることで「「理想」の光明城を攻め取」る行為にほかならなかったのである。

こうした啄木の革命が終焉を迎えた時、新田耕助は聞き手として舞台裏に下がり、後半は石本俊吉と天野朱雲の物語へと変貌する。ここに小説の分裂をみる論が数多く存在するわけだが、この点について詳しく検討するには後半における石本俊吉と天野朱雲の人物造形を分析していく必要がある。

石本俊吉は保護者の死や病気のために乞食をしながら東下りをして天野朱雲から託された手紙を新田耕助のもとまで届けにきた人物、天野朱雲は校長との議論の末に勤め先の学校から暇を出されて「遠い処」へと旅立ってゆく、石本俊吉から「豪い人」と称される人物としてそれぞれ登場する。先の上田博は天野について「「世界滅尽の大活劇」を演じる新田と、「人生の戦士」朱雲との関係は、「彼我二人の間は、真に同心一体、肝胆相照すといふ趣きの交情」の関係であり、二人の人物形象は同一人物に収斂される」と述べるが、むしろ石本俊吉こそが新田（＝啄木）と同一人物として後半に登場しているといえるだろう。第一に、石本俊吉が「酷薄と貧窮と恥辱と飢餓の中に、年少脆弱、然も不具の身を以て、健気にも単身寸鉄を帯びず、眠る間もなき不断の苦闘を持続し来つて、肉は落ち骨は痩せた壮烈なる人生の戦士」として位置づけられていることに着目したい。啄木は明治三九年三月九日の日記[一六]で次のように語る。

たとへ如何に平和な境遇に居ても、自分は心の富のために不断に戦ひ、苦しみ、泣かねばならぬ運命を荷つて居る。さうだ、矢張り自分の霊魂はたゞ戦闘と不幸の空気の中にのみ生活する事が出来るのだ。日が東の山に落つる事がなつても、一度覚めた心の初日の眠る時は無い。あゝ永久の不幸！　生ける詩の生活！　絶痛なる生命の音楽をきく思ひがする。真の幸福は不幸なる者にのみ与へられる。イヤ、真の幸福とは清浄なる不幸それ自身の一異名である。

石本俊吉という人物は「たゞ戦闘と不幸の空気の中にのみ生活する事が出来る」啄木の姿とオーバーラップする存在として語

られていることは言を俟たない。第二に、石本俊吉が「ナポレオン」として作中で語られているという点である。例えば「林中書」をみると「何処か似て居るとかで又ナポレオンとも呼ばれた」と記されているように[一七]、啄木にとって「ナポレオン」の表象はとりもなおさず自己を表象する行為だったのである。これら二点から判断しても、石本俊吉は第二の啄木として作中に描出されているといってよい。

では、対する天野朱雲はどのような人物であったか。それはすなわち、「戦闘と不幸の空気の中にのみ生活」しうる啄木を激励し、慰藉する人物だったのではないか。天野は旅立つ石本に対して、次のような激励の言葉を贈っている。

君も不幸な男だ、実に不幸な男だ。が然し、余り元気を落すな。人生の不幸の滓まで飲み干さなくては真の人間に成れるものぢやない。人生は長い暗い隧道だ、処々に都会といふ骸骨の林があるッ限。それにまぎれ込んで出路を忘れちや可けないぞ。そして、脚の下にはヒタ〳〵と、永劫の悲痛が流れて居る、恐らく人生の始よりも以前から流れて居るんだナ。それに行先を阻まれたからと云つて、其儘帰つて来ては駄目だ、暗い穴が一層暗くなる許りだ。死か然らずんば前進、唯この二つの外に路が無い。前進が戦闘だ。戦ふには元気が無くちや可かん。だから君は余り元気を落しては可けないよ。少なくとも君だけは生きて居て、そして最後まで、壮烈な最後を遂げるまで、戦つて呉れ給へ。血と涙さへ涸れなければ、武器も不要、軍略も不要、赤裸々で堂々と戦ふのだ。この世を厭になつては其限だ、少なくとも君だけは厭世的な考へを起さんで呉れ給へ。今までも君と談合つた通り、現時の社会で何物かよく破壊の斧に値せざらんやだ。全然破壊する外に改良の余地もない今の社会だ。建設の大業は後に来る天才に譲つて、我々は先づ根柢まで破壊の斧を下さなくては不可。然しこの戦ひは決して容易な戦ひではない。容易でないから一倍元気が要る。元気を落すな。（傍線、稿者）

傍線箇所一つ目は「精神の死ぬ墓は常に都会だ。矢張予はまだ〳〵田舎に居て、大革命の計画を充分に準備する方が可のだ」[一八]という啄木の決意を支持する言葉がけであるし、二箇所目は「巧みに世に処するには、金が一番必要だ。予は此点に於て極めて不幸な境遇にある。実に予は不幸だ。或はこの不幸は自分の一生の間続くかも知れない」[一九]という啄木自身の境遇を示唆する言葉として理解できる。このことから、天野の言葉は啄木の実生活に大きく関与する言葉として受け取ることができる。そうすると、天野を媒介として石本へ投げかけられた「少なくとも君だけは生きて居て、そして最後まで、壮烈な最後を遂げるまで、戦つて呉れ給へ」という言葉はそのまま「戦闘と不幸の空気の中にのみ生活」する啄木を慰藉する言葉として把握することができよう。

つまるところ、後半の石本俊吉と天野朱雲の物語は戦闘と不幸に苛まれる啄木がその自己像を石本俊吉に仮託し、天野朱雲の言葉をもって不幸のうちに闘争する自己を鼓舞するという、自己に閉ざされた自己慰藉の物語として語られたのである。このことはもちろん啄木の置かれた境遇によるところが大きい。

啄木は渋民村に帰郷した後の六月に戦闘と不幸の渦中にいる自己を再認識している。

予は六月の初め十日を異様なる精神興奮の状態に過した。社会と習慣と規則とに対する一切の不平は危うく爆発しやうとした。爆発せんとして未だ発しえざる生命の煙はムラ〳〵と胸の中に渦巻いて居た。予は此時、三月以後、予自身を中心としたるこの村の種々の騒擾を採つて、他日一の大小説を物しやうと思ふた。これは遠からず必ず出来る筈である。[一〇]

こうした「社会と習慣と規則とに対する一切の不平」を啄木が抱くにいたったのは、彼にとって「故郷の人間は常に予の敵」だったからであった。「予自身を中心としたるこの村の種々の騒擾」とは、一つには彼が渋民尋常高等小学校に奉職する際に猛烈な抗議を受けたこと、また一つには啄木の父一禎の宝徳寺住職再任に対する妨害を被ったこと、さらには役場の助役である畠山亨が辞職を余儀なくされたことを指しており、啄木はこうした事態を「かくて我が一家を――つまり予を中心とした問題が、宗教、政治、教育の三方面に火の手をあげて渋民村を黒煙に包んでしまつた。この戦争は、十九世紀の初の仏国王党と革命との戦争其儘である」[一一]と語る。彼の八月中の日記に記された小説の構想の一つに

◎本年三月四日、乃ち予が帰任してからの渋民村、（一大社会小説。）

教育政治宗教三方面の問題を含み、明治現代の社会の縮図。過渡時代。純正なる旧時代の人間の死。旧時代と過渡時代を繋げる半文化人の暴威。新時代の暁光、（少年の新意気　人格の感化）主人公は予自身。その他数十名。[一二]

とあることから、彼はこの経験を『雲』とは別に小説化しようと試みていたようだが、彼を苦悩の淵に陥れた故郷の人間による疎外とそれへの闘争という彼自身のテーマは、石本俊吉と天野朱雲によって形象化されたのであった。

三　一元二面論の表象としての『雲』

啄木の自己は前半においては新田耕助、後半においては石本俊吉にそれぞれ仮託される形で表象されたことは先に述べたとおりであるが、両者の人物像は対照的なものとして描き出されているといえる。つまり、前半の新田耕助は代用教員としての幸福な自己を、後半の石本俊吉は戦闘と不幸の内に闘争する自己を啄木はそれぞれ表象したのである。この二つの相反する自己を語るために人物をそれぞれ書き分けたことが、前半と後半に分裂されることとなった要因であるといえよう。それでは、なぜこのように相反する自己が語られることとなったのだろうか。その答えは、啄木が当時抱いた一元二面論にあるように思われてならない。

啄木は明治三九年三月二〇日付の日記[一三]で以下のように自己の思想を説明する。

余は、社会主義者となるには、余りに個人の権威を重じて居る。さればといつて、専制的な利己主義者となるには、余りに同情と涙に富んで居る。所詮余は余一人の特別なる

意味に於ける個人主義者である。然しこの二つの矛盾は只余一人の性情ではない。一般人類に共通なる永劫不易の性情である。自己発展と自他融合と、この二つは宇宙の二大根本基礎である。

この「自己発展」と「自他融合」という二大思想はそのまま『雲』の前半と後半に対応している。前半の物語は新田耕助が実践する課外教授における理想の教育を展開し、その休講措置を発端とした校長への革命・勝利というある種の空想的解決を語ることで、発展した自己像を小説に実現していく構図となっている。この構図はまさに啄木のいう「権威と強者との道徳」[二四]を小説のうえに実現させようとしたその試みとして受け取ることができよう。このような理想像を語る彼の行為は彼自身を「これを書いて居るうちに、予の精神は異様に興奮して来た」[二五]という恍惚状態に陥らせてゆき、結局は現実の世界でも啄木は校長にストライキを起こすこととなるわけだが、彼自身の理想像を小説のうえに展開することで自己の更なる発展ないしは飛躍を志向していった啄木の行為は、小説のうえに「自己発展」を企図していたことの証左となる。さらに後半の物語は「酷薄と貧窮と恥辱と飢餓の中に、年少脆弱、然も不具の身を以て、健気にも単身寸鉄を帯びず、眠る間もなき不断の苦闘を持続し来つて、肉は落ち骨は痩せた壮烈なる人生の戦士」と表現されるように、不遇な状況下で苦闘する石本俊吉に対して同情とエールを送る天野朱雲の物語であり、「同情と涙に富ん」だ啄木の目が見え隠れしていることはいうまでもない。このようにみていくと、『雲』の分裂は啄木自身の一元二面論によって引き起こされたということは首肯できよう。先の猪野謙二も「小説の前半はそういう形で、革命を信じ、自分をナポレオンになぞらえ、「日本一の代用教員」をもって自認するといったように、作者自身のきわめて積極的な自己肯定、楽天的な自己主張の態度が貫かれているが、後半になると、いわばそういう前半の主人公の性格とちょうど裏合わせになっている、代用教員としての当時の啄木自身の悲痛な落魄の現実が別の男において形象化されている」ことにより「作者自身の内面の声が、いわばこういう二つの側面に分裂し、小説自身も分裂してしまっている」と指摘するが、そもそも新田耕助という幸福な自己と石本俊吉という不幸と闘争の自己をそれぞれ描き分ける動機となったのが啄木の一元二面論だったと理解すれば、それは単なる啄木の「内面の声」というよりはむしろ、ワグネルの「意志拡張の愛」の影響下で生まれ、啄木の精神的支柱となっていった一元二面論という思想によるものだということができる。

ただし、「自己発展」と「自他融合」という矛盾する二大思想をワグネルの「意志拡張の愛」のもとに統一しえた啄木からすると、換言すれば「意志といふ言葉の語義を拡張して、愛を、自他融合の意志と解」き、「この意志に自己発展と自他融合の二面ありと解する」という到達点にいたった啄木からすれば、『雲』はワグネルの「「意志拡張の愛」の世界観」を描こうとしたという点で一貫した小説として執筆されたということになる。[二六]つまり、『雲』に分裂をみる我々は作品のうえに表象された啄木の一元二面論を見落としていることとなる。そこに、啄木の小説技法上の限界があったのであり、ついに未完の

ま日の目をみることのなかった所以を知ることができるのではないだろうか。池田功[二七]は「理論的イメージでとらえたワグネル的な「愛」の思想の持ち主である人物像を、具体的にイメージできなかったのが未完の原因の一つとしてある」と指摘するが、むしろワグネルの「意志拡張の愛」から導き出した一元二面論を小説に描き出そうと自己の感情や思想を前面に押し出した結果、小説としての一貫性が崩壊し、ついにはそれらを接続しえなかったことが、未完に終わった原因だといえよう。

『雲』は啄木の自意識の表出、言い換えればまるでTwitterの「つぶやき」のような文学表象の産物にほかならなかった（このようにとらえると、明治から現代にわたって自己の感情を公に向けて吐露する行為は若者に通底する文化として存続しているように思われる）。だからこそ読者との間に隔絶が生じ、その結果小説の分裂や革命の矮小性が指摘されることとなったのである。

おわりに

『雲』は啄木の抱いた一元二面論やそれに付随するように生じる彼自身の感情や思想を原動力として執筆された小説であった。また、そうした感情は代用教員としての自己に対する優越や生活難、遠藤校長や故郷の人間との確執によって引き起こされたものであり、その意味において「生涯を通じて現実の支配に屈することなく、現実に対する比判（ママ）精神をいよいよ発展せしめていつた、そのさいしよの現れ」[二八]としての性質を帯びた小説だったのである。ただ、そうした外的要因により形成された内面の発露によって『雲』は創作されたがゆえに、『雲』の文学表象は啄木自身のうちに閉ざされることとなる。前半においては彼の理想の教師としての自負や渋民村の人間への敵対心によって理想的な教師像や敵への報復が語られ、後半においては自身の不幸への自覚と闘争の決意によって不遇な状況において闘争する自己像とそれへの慰藉が語られる。このような、あくまで自己の置かれた状況によって生じる思想や感情を描くことで、発展した自己像や自己への鼓舞をその文学表象のうえに達成し、啄木は異様な興奮状態へと陥ってゆく。その意味において、『雲』の表象は啄木自身が求めるものを、描くという行為をとおして追求することで自己内解決へと向かっていく、いわば〈自閉する文学表象〉としての様相を帯びるのである。だがそれは啄木の小説技法上の問題によって分裂の指摘や「無邪気に革命健児ぶりを発揮するいい気な主人公の英雄気取りがいやに鼻につく」[二九]といった所感を抱かれる事態を招く要因となってしまう。『雲』とは、そのような自己と他者との連絡が断たれた、論争的なテキストなのである。

注

一　猪野謙二『明治の作家』（昭和四一年、岩波書店）
二　小田切秀雄『日本近代文学研究』（昭和二五年、東大協同組合出版部）
三　橋本威「啄木と自然主義・社会主義」（『近代文学試論』第八号、昭和四五年、広島大学近代文学研究会）
四　『啄木全集』第五巻（昭和四二年、筑摩書房）、一〇二頁
五　同右、九五頁

六　久保田正文「啄木――二重生活について」（『文学』第一〇巻、昭和五一年、岩波書店）
七　『啄木全集』第五巻、九八～九九頁
八　『石川啄木全集』第四巻（昭和五五年、筑摩書房）、一〇五頁
九　『石川啄木全集』第三巻、解説（昭和五三年、筑摩書房）
一〇　上田博『啄木小説の世界』（昭和五五年、双文社）
一一　『啄木全集』第五巻、一〇〇頁
一二　同右、一〇二頁
一三　水本徳明「日本の小学校における場としての職員室の形成――明治期学校管理論の分析を通して――」（『日本教育経営学会紀要』第四七号、平成一七年五月、日本教育経営学会）
一四　米田利昭「『雲は天才である』」（『国文学　解釈と鑑賞』第五〇巻第二号、昭和六〇年二月、至文堂）
一五　『啄木全集』第五巻、九六頁
一六　同右、六九～七〇頁
一七　『石川啄木全集』第四巻、九五頁
一八　『啄木全集』第五巻、一〇一頁
一九　同右一〇四頁
二〇　同右、一〇〇頁
二一　同右、一〇一頁
二二　同右、一一一頁
二三　同右、七九頁
二四　同右
二五　同右、一〇二頁
二六　同右、八一頁
二七　池田功「啄木小説の世界の研究そのⅠ」（『明治大学大学院紀要　文学篇』第二〇号、昭和五八年二月、明治大学大学院）
二八　窪川鶴次郎『石川啄木』（昭和三三年、五月書房）
二九　高阪薫『四迷・啄木・藤村の周縁――近代文学管見――』（平成六年、和泉書院）

（はやし　いっせい　福井県立鯖江高等学校）